

仮想場面における挑発、報復、制裁としての 攻撃に対する幼児の道徳的判断

越 中 康 治*

本研究では、挑発的攻撃、報復的攻撃、制裁としての攻撃の各タイプの攻撃行動に関する幼児の認知を比較検討した。4, 5歳の幼児を対象として、主人公が他児に対して各攻撃行動を示す場面を紙芝居で提示し、①主人公が示した攻撃行動の善悪判断、②攻撃行動を示した主人公を受容できるかの判断、③幼児が日常、主人公と同様の攻撃行動をするかの報告を求めた。結果として、①幼児は挑発的攻撃は明らかに悪いことであると判断するものの、報復的攻撃及び制裁としての攻撃に関しては善悪判断が分かれており、全体として良いとも悪いともいえないという判断を示した。また、②幼児は挑発的攻撃を示す主人公を明らかに拒否していたが、報復的攻撃及び制裁としての攻撃を示した主人公とは一緒に遊んでもよいと判断した。さらに、③挑発的攻撃及び報復的攻撃に関して、ほとんどの幼児は日常示すことはないと回答したものの、制裁としての攻撃に関しては示すと回答した者も少なからずいた。本研究から、報復的公正に関する理解は4, 5歳児にも認められることが明らかとなった。幼児が報復や制裁のための攻撃を正当化する可能性が示唆された。

キーワード：道徳的判断、挑発的攻撃、報復的攻撃、制裁としての攻撃、幼児

問 題

Turiel (1983) の社会的領域理論によれば、道徳的な判断や行動の基盤となる社会的認知は、道徳、慣習、個人という互いに独立した3つの思考領域から構成される。社会的領域理論に基づく子どもの道徳的判断に関する研究では、3つの領域の内、道徳と慣習の2つの領域に注目するアプローチ (domain approach) が主流となってきた (Helwig & Turiel, 2002)。こうしたアプローチにおいては、子どもが様々な違反行為を、道徳領域から思考するか、慣習領域から思考するかということが問題とされてきた。ある行為が道徳領域から思考されるということは、その行為自体が善悪を規定する要素を内在しているため、いかなる社会的文脈においても悪い(あるいは良い)と判断されるということを意味する。一方、慣習領域から思考されるということは、その行為自体が善悪を規定しないため、善悪が社会的文脈に相対的となるということを意味する (首藤・二宮, 2003)。

社会的領域理論において、攻撃行動は、道徳領域の思考から悪いと判断される行動の典型であるとされる (首藤・二宮, 2003)。攻撃行動は、“相手に被害や苦痛を与えることを意図した行動” (アロンソン, 1994) である。

それ故、攻撃行動自体が、社会的文脈、他者の期待や規則、権威者の指示・命令とは無関係に、「絶対にしてはいけない」「決して許されるべきではない」という善悪を規定する要素を内在化している (首藤・二宮, 2003)。

道徳領域の思考から攻撃行動を悪いこととする判断は、幼児期の早い段階で示される。例えば、保育園児を対象として調査研究を行った Smetana (1981) は、2歳半ほどの年少児でも、保育園にルールがあるかないかにかかわらず、道徳領域の違反行為 (叩くなど) を慣習領域の違反行為 (先生をファーストネームで呼ぶなど) よりも悪いことであると判断することを指摘している。これまでの道徳的判断に関する研究においては、幼児が遅くとも4, 5歳までには、道徳領域の違反行為と慣習領域の違反行為とを区別し、攻撃行動に代表される道徳領域の違反行為をより重大なものと判断することが一貫して指摘されている (レビューとして Helwig & Turiel, 2002 参照)。

しかしながら、攻撃行動が常に否定的な評価を受けるかということ、必ずしもそうではない。例えば、テロ行為による被害を受けた国の国民が、テロに対する報復・復讐のために、自国が他国を爆撃することを肯定的に評価するということもある (アロンソン, 1994)。敵に対して向社会的に振舞うよりも、攻撃を示した方が社会的に称賛されるという場合もあり、攻撃行動は悪、向社会的行動は善というような単純な二分法には限界

* 広島大学大学院教育学研究科
ecchuu@hiroshima-u.ac.jp

がある(Strayer & Noel, 1986)。社会的領域理論においても、例えば「体罰はしついでである」などと、攻撃行動が慣習領域から思考された場合には、状況(どの程度かなど)に依存した判断がなされることが指摘されている(首藤・二宮, 2003)。

幼児でも否定的な評価を下さない可能性がある攻撃のタイプとして、先に記したような報復のための攻撃がある。Lesser (1959) は、児童を対象とした研究で、相手の挑発がない場合に不当な攻撃(挑発的攻撃)を行うと仲間から拒否されるが、正当防衛のための攻撃(報復的攻撃)であれば仲間はその必要性を認め、むしろ仲間から受容される可能性を示唆している。また、幼児を対象とした研究で、前田・片岡(1993)は、仲間から積極的に好かれている幼児(典型的には、ある仲間からは人気があるが、他の仲間からは拒否されている幼児)の中にも攻撃性を示す者が含まれている可能性を示唆し、攻撃性の量的相違だけでなく、挑発的攻撃、報復的攻撃といった攻撃の質的相違に注目していく必要性を指摘している。これまでの攻撃行動と仲間関係との関連について検討した研究では、基本的に、攻撃行動を示すことが仲間から拒否される原因の1つであるとされてきた(Coie & Kupersmidt, 1983; Dodge, 1983)。しかしながら、Lesser (1959) や前田・片岡(1993)の研究から、報復的攻撃のようなタイプの攻撃行動は、必ずしも仲間から否定的な評価を受けない可能性を示唆される。

さらに、正当防衛や仕返しのための報復的攻撃以上に許容される可能性がある攻撃として、懲らしめのための攻撃がある。幼児・児童を対象とした研究では、加害者を叩くなどの攻撃的な方法で被害者を守る行為を向社会的行動の1つとしてとらえている研究もある(Cummings, Hollenbeck, Iannotti, Radke-Yarrow, & Zahn-Waxler, 1986)。また、幼児向けの物語やテレビ番組の中でも、正義の味方が悪役に攻撃を示すという場面が見受けられる。攻撃行動が悪いことであるとはいえ、悪を懲らしめ被害者を助けるためには攻撃もやむなしという信念が、幼児期において既に形成されている可能性もある。

事実、後藤(1998)は、2歳児でも、一方が他方に不当なことをしている場面を目撃すると、自分には関係のないことであっても義憤を発し、噛み付くなどの攻撃行動を示すことによって介入することがあると報告している。また、年中児を対象として観察研究を行った越中(2001)は、幼児が第三者として他児同士の対人葛藤場面に介入する際、攻撃行動を示すことが多いことを報告している。男児は加害者に身体的攻撃及び言

語攻撃を示すことが多く、女児は被害者に支持・同意を示し、被害者に追従することによって、加害者を遊び集団から排斥するという関係性攻撃(仲間関係を操作することで相手に危害を加える攻撃; Crick & Grotpeter, 1995)を示すことが多いと報告されている。さらに、年長児を対象とした攻撃行動の観察研究では、全攻撃行動の約1割が「仲間への同情」から示される攻撃行動(仲間が攻撃されたのを見たり、聞いたりした幼児が、仲間を攻撃した者に対して仕返しをする)であることが指摘されている(森野, 1999)。これらの研究から、幼児が、身体的攻撃、言語的攻撃、あるいは関係性攻撃を示すことによって加害者を懲らしめることが実際にあるといえる。

このような、第三者が加害者に対して示す攻撃的な介入行動は、社会心理学の分野において、攻撃行動が有する対人機能の観点から、制裁としての攻撃¹として分類されている(大淵, 1987)。大淵(1993)は、他者の不正を知覚すると、自分が直接被害を受けていなくても怒りが生じ、その怒りが不正行為を矯正し社会的公正を回復することなどを目的とした制裁としての攻撃の実行を動機づけるとしている。制裁としての攻撃は、公正の回復や責任の帰属などの道徳的な規範や認知と関連する攻撃行動であり、攻撃行動であるにもかかわらず正当化されやすいとされる(大淵, 1987)。それ故、道徳性に関する研究を行う上で、見過ごすことのできない行動であると考えられる。しかしながら、社会心

¹ 制裁としての攻撃は、第三者だけでなく被害者自身が行うこともある。しかしながら、これまでの幼児及び児童を対象とした研究では、被害者が示す応答的な攻撃行動に関しては、一貫して、報復あるいは報復的攻撃(濱口, 1992; 片岡, 1996)という語が使用されてきた。大淵(1993)によれば、報復とは、制裁と類似の行為であり、社会的側面を含まない個人的な仕返しのことである。また、畠山・畠山・山崎(2002)は、制裁行為には、公正の回復といった意味での社会規範の維持を目的とする公的制裁と、それを含まない個人的制裁があり、報復的攻撃はこの個人的制裁に当たるとしている。制裁としての攻撃と報復的攻撃の違いは、その動機が社会的側面を含むか否かというところにあるものと考えられる。しかしながら、大淵(1993)が指摘するように、被害者自身が報復をすることに対して人々が比較的寛容であり、個人的な仕返しであっても制裁としてとらえることもあるためか、制裁と報復の区別は画然としていない。

制裁としての攻撃と報復的攻撃を明確に区別して定義することは困難であるが、少なくとも幼児を対象とした場合には、発達を考慮すると、応答的な攻撃行動が、社会的側面を含んでいることは稀であるものと考えられる。そこで、本研究では、被害者の応答的行動としての攻撃と、第三者の介入行動としての攻撃との混同を避けるためにも、被害者の応答的攻撃を報復的攻撃、第三者が介入の際に示す攻撃を制裁としての攻撃と定義する。

理学の分野においても報復や制裁などの報復的公正に関する研究は少なく、今後の研究課題として重要性が指摘されている(田中, 1998)。

発達心理学の分野においても、制裁としての攻撃は、報復的攻撃と同様、応報の規範(不正を為した者は、それに相応しい苦しみを受けるべきであるという規範; 大淵, 1987)に則った攻撃行動であり、公正さという概念の理解と関係する可能性が示唆されている(島山他, 2002)。しかしながら、従来の公正さに関する研究においては、報酬分配の公正さに焦点がしばられており、罰などのネガティブなものの公正さに関する検討はほとんどなされていない(渡辺, 1992)。いつ頃から攻撃行動の公正さに関する理解が示されるようになるかは明らかにされておらず、この点に関して、発達の検査の必要性が指摘されている(島山他, 2002)。

これまで報復的公正の問題が検討されてこなかった一因として、従来の研究では、道徳領域の違反行為と慣習領域の違反行為との違いを自明のものとして扱い(高井, 2004)、攻撃行動は全て道徳領域の違反行為に属すると固定的に考えられてきたことがあると考えられる。そのため、攻撃行動に関する認知の発達の研究においては、攻撃行動が示されるに至るまでの社会的文脈(どのような出来事が攻撃行動を導いたかなど)が考慮されることがなかった(Underwood, 2002)。ところが、仲間評価と攻撃性との関連について検討した研究(前田・片岡, 1993)では、先述の通り、幼児がどのような社会的文脈から攻撃行動を示すかによって仲間からの評価が異なる可能性が示唆されている。すなわち、自ら他者に挑発的攻撃を示す者は仲間から拒否されるが、他者の挑発に対する報復的攻撃を示す者は必ずしも拒否されない可能性がある。これは幼児が報復的公正に理解を示している可能性を示唆するものである。しかしながら、道徳的判断の研究においては、攻撃行動に対する道徳的判断に及ぼす社会的文脈の影響を実証した研究は見られないのが現状である。

そこで、本研究では、攻撃行動を一括りに扱うのではなく、社会的文脈の異なる3つのタイプの攻撃行動(挑発的攻撃、報復的攻撃、制裁としての攻撃)を設定して、幼児の道徳的判断を比較検討する。もし、幼児が攻撃行動を道徳領域から思考するならば、社会的文脈は考慮されない筈である。故に、この3つのタイプの攻撃行動は、いずれも悪いと否定的な評価を受けるであろう。しかし、幼児が攻撃行動を慣習領域から思考するならば、幼児は攻撃の社会的文脈を考慮し、報復的攻撃及び制裁としての攻撃に対しては、必ずしも悪いという否定

的な評価は下さないであろう。後者の場合、幼児は報復的公正に関して理解を示しているといえる。

本研究の第1目的は、攻撃行動に対する道徳的判断を行う上で、幼児が社会的文脈を考慮するか否か、すなわち、幼児が攻撃行動を道徳領域から思考するか、慣習領域から思考するかを明らかにすることである。この目的のために、挑発的攻撃、報復的攻撃、制裁としての攻撃を、幼児がどのように認知しているかを比較検討する。具体的には、主人公が他児に対して各タイプの攻撃行動を示す場面を幼児に紙芝居で提示して、①主人公が示した攻撃行動の善悪判断(以下、善悪判断)、②攻撃行動を示した主人公をどの程度受容できるかの判断(受容判断)、③幼児が日常、主人公と同様の攻撃行動をするかの報告(自己報告)を求める。幼児が、攻撃行動を慣習領域から思考し、報復的公正に理解を示すならば、挑発的攻撃よりも報復的攻撃及び制裁としての攻撃の場合に、①攻撃行動をより良いと判断し、②攻撃行動を示した主人公を受容できると判断し、③日常、同様の攻撃行動をすると報告するものと予想される。

本研究の第2目的は、攻撃行動に対する幼児の道徳的判断と幼児が実際に示す攻撃性との関連について探索的に検討することである。子どもの道徳的判断に関するこれまでの研究においては、認知や思考と実際の行為との関連について、十分な検討がなされてこなかった(レビューとして Helwig & Turiel, 2002 参照)。特に攻撃行動を扱った道徳的判断の研究では、判断と実際の攻撃性との関連について検討されていない。道徳的判断の研究において、幼児は、4、5歳までに、攻撃行動を道徳領域の思考から悪いと判断することができるとされる(Helwig & Turiel, 2002)。しかし、4、5歳の幼児でも攻撃行動は悪いと判断できるにもかかわらず、実際には多くの幼児が多様な攻撃行動を示すことが明らかにされている(e.g., Crick & Grotpeter, 1995; Crick, Casas, & Mosher, 1997)。どのような場合に判断と実際の攻撃性が一致し、どのような場合に一致しないかを明らかにするためには、判断と実際の攻撃性との関連を詳細に検討する研究が必要である。

本研究では、判断と実際の攻撃性との関連を検討するにあたって、表出形態(身体的攻撃、関係性攻撃)と性別の要因を取り上げる。実際の攻撃性に関する研究では、身体的攻撃は女児よりも男児に多く、逆に、関係性攻撃は男児よりも女児に多いことが明らかにされている(Crick & Grotpeter, 1995; Crick et al., 1997)。道徳的判断に関する研究において、表出形態と性別の要因を検討

した唯一の研究が、Goldstein, Tisak, & Boxer (2002)の研究である。Goldstein et al. (2002) は、身体的攻撃と関係性攻撃に対する幼児の善悪判断を男女で比較した。その結果、身体的攻撃では女児よりも男児が悪いと判断したが、関係性攻撃では、逆に、男児よりも女児が悪いと判断する傾向にあった。

Goldstein et al. (2002) の結果を Crick & Grotpeter (1995) 及び Crick et al. (1997) の研究結果とあわせて考えると、男女ともに、悪いと認知している攻撃行動を自ら多く示していることになり、判断と実際の攻撃性とが一致しないことを示す興味深い結果であるといえる。しかし、残念ながら、Goldstein et al. (2002) の研究は、彼ら自身が指摘するように、実際の攻撃性を測定していないので、判断と実際の攻撃性との関連をみることはできていない。判断と実際の攻撃性との関連を正確に知るためには、同一研究の中で判断と実際の攻撃性とを測定し、両者の関連を検討する必要がある。そこで、本研究では、攻撃行動の表出形態として身体的攻撃と関係性攻撃の2つを取り上げ、これら2つの攻撃に関する教師評定を実施して幼児の実際の攻撃性を測定することによって、道徳的判断と実際の攻撃性との関連が、表出形態や性別によってどのように異なるかを明らかにする。

方 法

参加者 参加者は幼稚園の異年齢クラス児69名(男児37名, 女児32名)であった。なお, 参加者のうち, 男児1名, 女児2名は, 後述の手続きにより分析対象から除外された。その結果, 分析対象者は66名(男児36名, 女児30名: 平均月齢61.0ヶ月, 月齢範囲50ヶ月から73ヶ月)となった。

要因計画 要因計画は, 3 (タイプ: 挑発的攻撃, 報復的攻撃, 制裁としての攻撃) × 2 (性別: 男児, 女児) × 2 (群: 身体的攻撃群, 関係性攻撃群) の3要因計画であった。第1要因は被験者内要因, 第2と第3の要因は被験者間要因であった。

材料

(1) **幼児用の実験課題** 挑発的攻撃場面(主人公が他児の物を奪うために攻撃を仕掛ける), 報復的攻撃場面(主人公が他児から物を奪われ, 取り返すために攻撃を示す)及び制裁としての攻撃場面(主人公が, 他児から奪われた物を仲間に取り返してやるために攻撃を示す)の3つの攻撃場面を提示するための紙芝居を作成した。さらに, 各場面について, 主人公の攻撃行動の表出形態が身体的攻撃である場合と関係性攻撃である場合の2種類を作成した(TABLE 1参照)。なお, これらの6種類の紙芝居は, 登

TABLE 1 各攻撃場面の内容

	挑発的攻撃場面	主人公が, 砂場で遊んでいる。主人公は, 隣にいる他児が持っているバケツを使いたくなる。主人公は, 「貸してくれないなら, 叩くよ」と言って, 他児からバケツを取る。
身体的攻撃群	報復的攻撃場面	主人公が砂場で, バケツを使って遊んでいる。隣にいる他児が, 主人公のバケツを勝手に取る。主人公は, 「返してくれないなら, 叩くよ」と言って, 他児からバケツを取る。
	制裁としての攻撃場面	砂場でバケツを使って遊んでいた仲間が, 他児にバケツを取られるところを, 主人公が目撃する。主人公は, 「返してあげないなら, 叩くよ」と言って, 他児から仲間にバケツを取り返す。
	挑発的攻撃場面	主人公が, 砂場で遊んでいる。主人公は, 隣にいる他児が持っているバケツを使いたくなる。主人公は, 「貸してくれないなら, もう一緒に遊んであげないよ」と言って, 他児からバケツを取る。
関係性攻撃群	報復的攻撃場面	主人公が砂場で, バケツを使って遊んでいる。隣にいる他児が, 主人公のバケツを勝手に取る。主人公は, 「返してくれないなら, もう一緒に遊んであげないよ」と言って, 他児からバケツを取る。
	制裁としての攻撃場面	砂場でバケツを使って遊んでいた仲間が, 他児にバケツを取られるところを, 主人公が目撃する。主人公は, 「返してあげないなら, もう一緒に遊んであげないよ」と言って, 他児から仲間にバケツを取り返す。

場人物全員が男の子である男児用セットと、登場人物全員が女の子である女児用セットが作成された。また、参加者に3段階評定(後述の受容判断と自己報告)を求めるときに使用する○△×が記された評定用の図版、5段階評定(善悪判断)を求めるときに使用する大小2つの○が記された図版及び大小2つの×が記された図版を用意した。紙芝居及び図版はすべてA4の大きさであった。

(2) 攻撃性の教師評定尺度 Crick et al. (1997) の Preschool Social Behavior Scale-Teacher Form のうち、身体的攻撃6項目(「叩くよ」とか「やっつけてやる」などと言葉で仲間を脅す)など)と関係性攻撃5項目(「仲間に「あなたとは遊ばない」とか「私/僕の言うとおりにすればあなたと友達になってあげる」という)などの2つの下位尺度を翻訳して用いた磯部・佐藤(2003)の各項目を利用した。各項目について「非常にあてはまる(5点)」「わりにあてはまる(4点)」「少しあてはまる(3点)」「あまりあてはまらない(2点)」「まったくあてはまらない(1点)」の5段階評定を求め、各下位尺度別に1項目あたりの平均値を算出し、身体的攻撃得点、関係性攻撃得点とした(表2)。

手続き 実験は幼稚園の一室において個別に面接方式で実施した。実験に際し、参加者を、身体的攻撃について評定する群(身体的攻撃群)と、関係性攻撃について評定する群(関係性攻撃群)にランダムに割りあてた。教師評定による攻撃得点について、各群の等質性を確認するために、身体的攻撃得点と関係性攻撃得点に基づいて、それぞれ、2(性別)×2(群)の分散分析を行った。その結果、身体的攻撃得点では、性別の主効果が有意であり、女児よりも男児が身体的攻撃を示すと評定されていた($F(1, 62) = 8.76, p < .005$)。一方、関係性攻撃には有意な性差はみられなかった。これは、磯部・佐藤(2003)と同様の結果であった。また、身体的攻撃得点と関係性攻撃得点のいずれについても、群間差、交互作用はみられなかった。これらの結果から、男女

それぞれの身体的攻撃群と関係性攻撃群は等質であることが確認された。なお、月齢についても、2(性別)×2(群)の分散分析を行った結果、有意な性差、群間差、交互作用はみられず、等質であることが確認された。

実験に際しては、まず、各群の参加者に、挑発的攻撃場面、報復的攻撃場面、制裁としての攻撃場面を、それぞれ紙芝居で提示した。場面の提示後、参加者が各場面の内容を把握しているかを確認するために、物語中に提示された主人公の攻撃理由を再生するよう求めた。ほとんどの参加者はここで再生することができたが、再生できなかった一部の参加者には、確認のため再度紙芝居を提示した。これらの手続きを経ても、主人公の攻撃理由を再生することができなかった3名の参加者のデータは分析の対象から除外した。場面の提示及び内容の確認の後、各場面について以下の質問を行った。なお、各場面の提示順序はカウンターバランスを行った。

(1) 善悪判断 主人公が示した攻撃行動に対して、5段階で善悪判断を求めた(「すごく良い(5点)」「少し良い(4点)」「どちらでもない(3点)」「少し悪い(2点)」「すごく悪い(1点)」。なお、本研究で評定を求めるときには、主として言語による回答を求めたが、参加者が容易に回答できるよう、さらには、言語による報告が妥当であることを確認するために、補助的に図版を使用した。なお、言語による回答と図版を指差す動作とが食い違いか否かを確認した結果、分析対象者66名のうち、食い違う幼児は皆無であった。幼児の回答が妥当なものであることが確認された。

5段階評定に際しては、まず、○△×が記された図版を提示して、「××ちゃん(主人公)が『叩くからね(身体的攻撃群) / もう一緒に遊んであげないからね(関係性攻撃群)』って言ったのは、(評定図版の○を指差しながら)いいことだったかな、(評定図版の×を指差しながら)悪いことだったかな、それとも、(評定図版の△を指差しながら)どっちでもないかな」と質問し、図版を指差しながら言語で回答するよう求めた。「いいことだった」と回答した場合には、さらに、大小の○が記された図版を提示して、「(大きい○を指差しながら)すごくいいことだったかな、それとも、(小さい○を指差しながら)少しだけいいことだったかな」と質問し、大小いずれかの○を指差しながら言語で回答するよう求めた。「悪いことだった」と回答した場合にも、同様に、大小の×が記された図版を提示して、大小いずれかの×を指差しながら言語で回答するよう求めた。評定の後、「どうしてそう

TABLE 2 分析対象者の教師評定に基づく攻撃得点と月齢(標準偏差)

	身体的攻撃群		関係性攻撃群	
	男児	女児	男児	女児
<i>n</i>	18	15	18	15
身体的攻撃得点	2.23 (0.85)	1.80 (0.61)	2.39 (0.84)	1.73 (0.45)
関係性攻撃得点	1.84 (0.47)	1.68 (0.49)	1.72 (0.43)	1.83 (0.48)
月齢	61.2 (5.63)	60.4 (7.60)	61.7 (6.72)	60.7 (6.52)

思う?」と質問し、理由づけを求めた。

(2) **受容判断** 各場面の主人公をどの程度受容できるかの判断を3段階で行うよう求めた(「すごく遊びたい(3点)」「少し遊びたい(2点)」「遊びたくない(1点)」。○△×が記された図版を提示して、「○○ちゃん(参加者)は、××ちゃん(主人公)と、(評定図版の○を指差しながら)すごく遊びたいと思うかな、(評定図版の△を指差しながら)少しだけ遊びたいと思うかな、それとも(評定図版の×を指差しながら)遊びたくないと思うかな」と質問し、○△×のいずれか1つを指差しながら言語で回答するよう求めた。併せて、理由づけを求めた。

(3) **自己報告** 参加者自身が、日常、各場面の主人公と同様の攻撃行動をするかを3段階で報告するよう求めた(「よくする(3点)」「少しする(2点)」「ぜんぜんしない(1点)」。挑発的攻撃については「○○ちゃん(参加者)は、お友達の物が欲しくなったとき、『貸してくれないと、叩くよ/もう一緒に遊んであげないよ』って言うかな」、報復的攻撃については「○○ちゃん(参加者)は、使っていた物をお友達にとられたとき、『返してくれないと、叩くよ/もう一緒に遊んであげないよ』って言うかな」、制裁としての攻撃については「○○ちゃん(参加者)は、お友達が他の子の物を勝手に取ったとき、『返してあげないと、叩くよ/もう一緒に遊んであげないよ』って言うかな」と質問した。「(2) 受容判断」と同様、○△×が記された図版を用いて、回答を求めた。

結 果

以下の分析では、各課題得点について、3(タイプ)×2(性別)×2(群)の分散分析を使用した。分散分析後の多重比較にはRyan法($p < .05$)を使用した。

善悪判断 善悪判断得点の平均値と標準偏差をTABLE 3に示した。分散分析の結果、タイプの主効果が有意であった($F(2, 124) = 42.72, p < .001$)。多重比較の結果、挑発的攻撃<報復的攻撃、挑発的攻撃<制裁としての攻撃がそれぞれ有意であった。幼児は、挑発的攻撃($M = 1.51$)を明らかに悪いと判断した。しかしながら、報復的攻撃($M = 3.02$)と制裁としての攻撃($M = 3.33$)に対する善悪判断には有意差がなく、どちらも5点尺度の3点台の値を示しており、幼児は全体として良いとも悪いともいえないと判断していた。なお、交互作用については、いずれも有意ではなかった。

受容判断 受容判断得点の平均値と標準偏差をTABLE 4に示した。分散分析の結果、まず、タイプの主効果が有意であった($F(2, 124) = 28.59, p < .001$)。多重比較の結果、挑発的攻撃<報復的攻撃、挑発的攻撃<制裁としての攻撃がそれぞれ有意であった。幼児は、挑発的攻撃($M = 1.42$)を示した主人公よりも、報復的攻撃($M = 2.16$)及び制裁としての攻撃($M = 2.23$)を示した主人公と一緒に遊びたいと判断していた。

次に、タイプと群の交互作用が有意であった($F(2,$

TABLE 3 善悪判断得点(標準偏差) 5点満点

	身体的攻撃群			関係性攻撃群		
	男児	女児	全体	男児	女児	全体
<i>n</i>	18	15	33	18	15	33
挑発的攻撃	1.56 (1.12)	1.40 (0.80)	1.48 (1.00)	1.22 (0.53)	1.87 (1.36)	1.52 (1.06)
報復的攻撃	3.00 (1.76)	2.73 (1.69)	2.88 (1.76)	2.67 (1.76)	3.67 (1.66)	3.12 (1.82)
制裁としての攻撃	2.94 (1.65)	2.73 (1.77)	2.85 (1.73)	3.89 (1.56)	3.73 (1.39)	3.82 (1.51)

TABLE 4 受容判断得点(標準偏差) 3点満点

	身体的攻撃群			関係性攻撃群		
	男児	女児	全体	男児	女児	全体
<i>n</i>	18	15	33	18	15	33
挑発的攻撃	1.39 (0.76)	1.60 (0.88)	1.48 (0.83)	1.28 (0.65)	1.40 (0.80)	1.33 (0.74)
報復的攻撃	2.00 (0.94)	1.93 (0.93)	1.97 (0.95)	2.39 (0.89)	2.33 (0.94)	2.36 (0.93)
制裁としての攻撃	2.11 (0.94)	1.87 (0.88)	1.99 (0.94)	2.56 (0.83)	2.40 (0.88)	2.48 (0.87)

124) = 4.22, $p < .05$)。単純主効果の検定の結果、制裁としての攻撃における群の効果があるであった ($F(1, 186) = 4.94, p < .05$)。幼児は、身体的攻撃による制裁 ($M = 1.99$) を示す主人公よりも、関係性攻撃による制裁 ($M = 2.48$) を示す主人公と一緒に遊びたいと判断していた。さらに、身体的攻撃群におけるタイプの効果 ($F(1, 124) = 5.44, p < .01$) 及び関係性攻撃群におけるタイプの効果 ($F(1, 124) = 27.37, p < .001$) がそれぞれ有意であった。多重比較の結果、いずれの群においても、挑発的攻撃 < 報復的攻撃、挑発的攻撃 < 制裁としての攻撃がそれぞれ有意であった。

自己報告 自己報告得点の平均値と標準偏差を TABLE 5 に示した。分散分析の結果、タイプの主効果が有意であった ($F(2, 124) = 4.44, p < .05$)。多重比較の結果、挑発的攻撃 < 制裁としての攻撃、報復的攻撃 < 制裁としての攻撃がそれぞれ有意であった。幼児は、挑発的攻撃 ($M = 1.25$) 及び報復的攻撃 ($M = 1.29$) よりも、制裁としての攻撃 ($M = 1.55$) を示すことが多いと報告した。なお、交互作用については、いずれも有意ではなかった。

相関分析の結果

(1) 身体的攻撃群の相関分析 身体的攻撃群の各課

題得点と教師評定に基づく身体的攻撃得点及び月齢との関係を検討した。ピアソンの相関係数を男女別に示した (TABLE 6)。各課題得点と身体的攻撃得点の間には男女共に有意な相関は見られなかった。しかし、各課題得点と月齢の間には、一部で負の相関が見られた。男児では、月齢の高い者ほど挑発的攻撃を悪いことと判断していた ($r = -.57$)。女児では、月齢の高い者ほど、挑発的攻撃を示す仲間を受容できないと判断し ($r = -.68$)、挑発的攻撃 ($r = -.45$) 及び制裁としての攻撃 ($r = -.53$) を自らが示すことはないとは報告する傾向にあった。

(2) **関係性攻撃群の相関分析** 関係性攻撃群の各課題得点と関係性攻撃得点及び月齢との関係を検討した。ピアソンの相関係数を男女別に示した (TABLE 7)。男児では、関係性攻撃得点と報復的攻撃に関する善悪判断得点 ($r = .41$) 及び自己報告得点 ($r = .42$) との間に、正の相関の有意傾向が見られた。実際に関係性攻撃を示すことの多い男児は、報復のために関係性攻撃を示すことを良いと判断し、こうした攻撃行動を日常示すと回答する傾向にあった。各課題得点と月齢の間には有意な相関は見られなかった。

女児では、関係性攻撃得点と挑発的攻撃に関する自

TABLE 5 自己報告得点 (標準偏差) 3点満点

	身体的攻撃群			関係性攻撃群		
	男児	女児	全体	男児	女児	全体
<i>n</i>	18	15	33	18	15	33
挑発的攻撃	1.11 (0.31)	1.27 (0.68)	1.18 (0.53)	1.22 (0.53)	1.40 (0.80)	1.30 (0.68)
報復的攻撃	1.28 (0.56)	1.27 (0.68)	1.27 (0.63)	1.22 (0.53)	1.40 (0.80)	1.30 (0.68)
制裁としての攻撃	1.33 (0.67)	1.27 (0.68)	1.30 (0.68)	1.67 (0.88)	1.93 (1.00)	1.79 (0.96)

TABLE 6 身体的攻撃群の相関分析の結果

		男児 ($n = 18$)		女児 ($n = 15$)	
		攻撃得点	月齢	攻撃得点	月齢
善悪判断得点	挑発的攻撃	-.32	-.57*	.10	-.38
	報復的攻撃	-.12	-.31	.11	-.12
	制裁としての攻撃	.13	-.16	.06	-.19
受容判断得点	挑発的攻撃	.00	-.09	.02	-.68**
	報復的攻撃	-.04	.07	-.24	-.30
	制裁としての攻撃	-.02	.26	-.24	-.23
自己報告得点	挑発的攻撃	-.20	.37	-.25	-.45†
	報復的攻撃	-.21	-.24	-.25	-.02
	制裁としての攻撃	-.33	-.07	-.19	-.53*

注) 攻撃得点は身体的攻撃得点である。 † $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

TABLE 7 関係性攻撃群の相関分析の結果

	男児(n= 18)		女児(n= 15)		
	攻撃得点	月齢	攻撃得点	月齢	
善悪判断得点	挑発的攻撃	.03	-.16	.09	-.39
	報復的攻撃	.41 [†]	.23	.16	-.31
	制裁としての攻撃	.05	.16	.21	-.42
受容判断得点	挑発的攻撃	-.20	.18	-.10	-.45 [†]
	報復的攻撃	.08	.19	-.43	-.44 [†]
	制裁としての攻撃	.15	.14	.04	.00
自己報告得点	挑発的攻撃	-.22	-.19	-.45 [†]	-.19
	報復的攻撃	.42 [†]	.15	-.17	-.58 [*]
	制裁としての攻撃	.14	.22	-.11	-.46 [†]

注) 攻撃得点は関係性攻撃得点である。

[†]p<.10 ^{*}p<.05

己報告得点との間に負の相関の有意傾向が見られた($r=-.45$)。教師から関係性攻撃を示すことが多いと評定された女児ほど、挑発的な関係性攻撃を示すことはないという報告する傾向にあった。また、自己報告得点及び受容判断得点と月齢との間に、一部で負の相関が見られた。月齢の高い女児ほど、挑発的($r=-.45$)、報復的($r=-.44$)な関係性攻撃を示す者を受容できないとし、自らが報復($r=-.58$)及び制裁($r=-.46$)のために関係性攻撃を示すことはないという報告する傾向にあった。

考 察

本研究の第1目的は、挑発的攻撃、報復的攻撃、制裁としての攻撃の各タイプの攻撃行動を、幼児がどのように認知しているかを比較検討することであった。その結果、幼児は善悪判断及び受容判断において、挑発的攻撃よりも報復的攻撃及び制裁としての攻撃を許容していた。また、自己報告において、挑発的攻撃及び報復的攻撃よりも制裁としての攻撃を自ら示すと報告していた。これらの結果は、第1目的の予想を概ね支持するものであった。幼児が攻撃行動に対して、慣習領域の思考から、社会的文脈を考慮した道徳的判断を行うことが明らかとなった。幼児は、報復的公正に関して理解を示すといえる。なお、本研究では、善悪判断及び受容判断において、幼児に理由づけを求めた。以下では、課題得点の結果に理由づけを結び付けて考察を行う。

善悪判断では、幼児は主人公が示した挑発的攻撃を「叩くよって言うから」「意地悪したから」などの理由で明らかに悪いと判断した。報復的攻撃に関しては、同様の理由から悪いと判断する者もいる一方で、「こっち(加害者)の方が悪い」「(加害者が)使いたくなかったから勝手に取ったけえ、この人(加害者)が悪いよ」などの理由から、加害者の行為と比較した上で、主人公の

攻撃を相対的に良いと判断する者もいた。さらに、制裁としての攻撃に関しては、報復的攻撃と同様の理由づけに加えて、「(叩くよと言うことが)偉いことかも知れんけえ」という回答も見られた。攻撃のタイプによって善悪判断得点が異なるという結果から、幼児が、攻撃行動を慣習領域の思考から判断している可能性が示唆される。攻撃行動に対する善悪判断は攻撃が示される文脈に左右され、幼児でも報復や制裁を目的とした攻撃であれば正当化することもあるといえる。善悪判断の結果から、報復的公正に関して、4、5歳児もある程度の理解を示していることが明らかとなった。

受容判断では、幼児は全体として、挑発的攻撃を仕掛ける者とは一緒に遊びたくないという判断をした。理由としては「意地悪じゃから」「(一緒に遊んだら)〇〇(参加者)の玩具も勝手に取っちゃう」などが挙げられた。報復的攻撃を示した者に対しては、同様の理由から遊びたくないという判断する者もいる一方で、「意地悪じゃないもん」「だってこの人(加害者)が悪い」などの理由で遊びたいと判断する者もいた。さらに、制裁としての攻撃を示した者に対しては、報復的攻撃と同様の理由づけに加えて、「(自分に玩具を)返してくれん子と遊んだら、怒ったりする」という回答も見られ、参加者のことも助けてくれるのではないかと期待から遊びたいと判断する者もいた。実際に幼児自身が被害者となったときに仲間が加害者に制裁としての攻撃を示した場合などは、より一緒に遊びたいという感情が喚起される可能性もある。また、善悪判断において制裁としての攻撃を悪いことと判断しながらも、受容判断においては「(制裁としての攻撃を示すことは)本当は偉いことかも知れんけえ」という理由から、制裁としての攻撃を示した主人公と一緒に遊びたいと判断する幼児もいた。こうした幼児は、制裁としての攻撃を基本的には悪いこととしながらも、情状酌量の余地があると判断

したものと考えられる。受容判断の結果から、報復的攻撃及び制裁としての攻撃を示すことが必ずしも仲間拒否につながらない可能性が示唆される。

なお、受容判断においては、表出形態に関して、身体的攻撃による制裁を示す者よりも、関係性攻撃による制裁を示す者がより受容されることが明らかとなった。この結果についての1つの解釈として、幼児が、身体的攻撃と関係性攻撃とでは制裁の強さが異なると認知した可能性が考えられる。幼児は、主人公が制裁として身体的攻撃を加えるよりも、関係性攻撃を加える方が穏当であると認知したのではないだろうか。本研究では、攻撃の強さを意図的に設定しておらず、幼児が攻撃の強さをどのように認知したかも測定していない。また、この結果は、受容判断においてのみ認められたものであり、必ずしも一般化することはできない。しかしながら、この結果は、制裁としての攻撃を評価する上で、幼児が攻撃の強さを考慮する可能性を示唆するものである。こうした解釈の妥当性を検証する上でも、今後は、攻撃の強さが幼児の判断にどのような影響を及ぼすかについても明確にする必要がある。

自己報告では、主人公と同様に挑発的攻撃あるいは報復的攻撃を示すかという質問に対して、大半の参加者は「ぜんぜんしない」と回答していた。それに対して、制裁としての攻撃に関しては「少しする」「よくする」と回答する者も少なからずいた。自己報告の結果に関して注目したいのは、善悪判断及び受容判断において、制裁としての攻撃と同様に肯定的に評価された報復的攻撃を、参加者が自らは示さないと回答していた点である。幼児の中にも、報復的攻撃は応報の規範に則った公正な攻撃行動であり許容できるとする者もいるが、攻撃行動であることにかわりはないことから、積極的に示すと報告することは憚られたのであろう。一方で、制裁としての攻撃に関しては、他者のためという大義名分があるということもあって、積極的に示すと報告する者もいたのではないかと考えられる。

本研究の第2目的は、攻撃行動に対する幼児の道徳的判断と幼児が実際に示す攻撃性との関連を探索的に検討することであった。相関分析から、道徳的判断と実際の攻撃性との関連について、興味深い結果が認められた。身体的攻撃に関しては道徳的判断と実際の攻撃性との間に関連は認められなかったものの、関係性攻撃に関して、男女で異なる関連性が認められた。男児では、教師から関係性攻撃を示すことが多いと評定された者ほど、報復のために関係性攻撃を示すことを良いことと判断し、こうした攻撃行動を日常示すと回

答する傾向にあった。男児の中には、報復のために関係性攻撃を示すことが正当であるという信念を抱いている者が少なからずいる可能性がある。それに対して、女児では、教師から関係性攻撃を示すことが多いと評定された者ほど、自ら相手に挑発的な関係性攻撃を示すことはないと報告していた。

女児の関係性攻撃における矛盾した結果は、月齢との関連においても認められる。教師評定による各攻撃得点と月齢との相関係数を算出したところ (TABLE 8)、月齢が高い女児ほど関係性攻撃を示しているという正の相関が見られた。しかしながら、女児では、月齢と自己報告得点との間には負の相関が見られた (TABLE 7)。すなわち、月齢の高い女児は、実際に関係性攻撃を示すことが多いにもかかわらず、関係性攻撃を示すことはないと報告していたことになる。

何故、女児において、自己報告と実際の攻撃性との間に不一致が生じたかということについては、2つの解釈が成り立つ。第1に、女児が自分の攻撃性について誤った認知をしている可能性である。実際には関係性攻撃を示す女児が、自分は関係性攻撃を示していないと認知していたのかもしれない。第2に、関係性攻撃を示す女児が、自己報告において社会的に望ましい報告をした可能性である。すなわち、自分が関係性攻撃を示すことを自覚していたが、関係性攻撃が悪いと判断されるので、自己報告では「関係性攻撃を示さない」と社会的に望ましい報告をしていたのかもしれない。Goldstein et al. (2002) が指摘するように、女児が男児よりも関係性攻撃のネガティブな側面について敏感であるとするならば、第2の解釈の方が妥当であるかもしれない。しかし、本研究の結果のみからは、女児において、何故、不一致が生じるかについて明言することはできない。今後は、関係性攻撃を示すことの多い女児を抽出して判断と実際の攻撃性との関連を詳細に検討するなど、この問題に特化した研究を行う必要がある。

ところで、表出形態と性別の要因は、道徳的判断には明確な効果を示さなかった。本研究において、Goldstein et al. (2002) の研究と異なる結果が得られた理由としては、2つの研究間で善悪判断の求め方が異なっ

TABLE 8 各攻撃得点と月齢との相関係数

	男児(n= 36)	女児(n= 30)
身体的攻撃得点	.36*	.07
関係性攻撃得点	.50**	.39*

* $p < .05$ ** $p < .01$

ていたことが考えられる。本研究では、身体的攻撃と関係性攻撃のそれぞれについて善悪判断を求めたのに対し、Goldstein et al. (2002) の研究では、より悪い方を強制的に選択させていた。つまり、Goldstein et al. (2002) の研究において、幼児は身体的攻撃も関係性攻撃もどちらも悪いと判断することができず、一方を悪いとすると、他方は悪くないとしなければならなかった。その結果、善悪判断の得点が相互依存的なものとなり、身体的攻撃と関係性攻撃との間で得点差が生じやすかったのであろう。これに対して、本研究では、善悪判断の得点は独立していたので、本研究の方が、幼児の認知をより適切に測定していた可能性が高い。このように考えると、本研究から、少なくとも、攻撃行動の表出形態が身体的攻撃であるか関係性攻撃であるかという要因は、攻撃行動に対する道徳的判断を決定づけるものではないといえる。表出形態と性別の要因は、判断そのものよりも、判断と実際の攻撃性との関連に影響を及ぼす要因であると考えられる。

以上、本研究では、幼児が攻撃行動に対して、慣習領域の思考から、社会的文脈を考慮した道徳的判断を行うことが明らかとなった。幼児は、報復的公正に関して一定の理解を示しているといえる。本研究の結果は、幼児の道徳的判断に関する研究において、行為の社会的文脈が判断に及ぼす影響を積極的に検討することの必要性を示すものである。Killen ら (Killen, Breton, Fergusto, & Handler, 1994 ; Killen & Sueyoshi, 1995) は、幼児を対象として、教師が攻撃行動に対していかなる説明を行い介入することを好むかを日米で比較している。その結果、米国の幼児が道徳領域からの説明 (他者を傷つけることとなるから叩くことを止めるべきだ) を、日本の幼児が慣習領域からの説明 (叩かれた者が泣き出すことで周囲の者がうるさく感じるから叩くことを止めるべきだ) を好むことを見出している。こうした結果から、Killen らは、日本の幼児が、攻撃を領域混合 (domain mixture) の問題としてとらえ、慣習領域からの思考を行っている可能性を示唆したが、この可能性を実証する研究はなされていなかった。本研究では、攻撃行動の社会的文脈を要因に加えることによって、この可能性を明確にしたといえる。

本研究で取り扱った制裁としての攻撃は、三者関係を想定しなければとらえることのできない攻撃行動であった。子どもの対人関係については、これまで主として二者関係を単位として研究が行われることが多く、三者関係を扱ったものは、その重要性が指摘されているにもかかわらず、まだ数少ない状況にある (本郷,

1994 ; Lansford & Parker, 1999)。しかしながら、対人関係のみならず、道徳的判断においても、今後、積極的に三者関係を考慮する必要があると考えられる。

制裁としての攻撃に関しては、挑発的攻撃や報復的攻撃とは異なり、攻撃者以外に攻撃によって利益を得る者 (懲らしめてくれたと感じる者) が存在する。故に、自己報告において自ら示すと回答する者が少なからずいたものと考えられる。自ら制裁としての攻撃を示すとした背景には、加害者に対する敵意や怒り、被害者に対する同情や愛他心などが想定される。いかなる心情から幼児が制裁としての攻撃を正当化するかについては、今後、詳細に検討する必要がある。また、幼児が攻撃行動を慣習領域から思考することから、制裁としての攻撃に対する道徳的判断は、加害者の犯した罪の程度や被害者の状況、さらには制裁の強さなどの状況要因による影響を強く受けるものと予想される。今後の道徳的判断に関する研究においては、攻撃行動の社会的文脈として様々なものを想定し、何故、攻撃行動が正当化されるのかを詳細に検討する必要がある。

引用文献

- アロンソン E. 古畑和孝 (監訳) 1994 ザ・ソーシャル・アニマル (第6版) 一人間行動の社会心理学的研究—サイエンス社 (Aronson, E. 1992 *The social animal* (6th ed). New York : W. H. Freeman and Company.)
- Coie, J. D., & Kupersmidt, J. B. 1983 A behavioral analysis of emerging social status in boys' groups. *Child Development*, **54**, 1400-1416.
- Crick, N. R., Casas, J. F., & Mosher, M. 1997 Relational and overt aggression in preschool. *Developmental Psychology*, **33**, 579-588.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. 1995 Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, **66**, 710-722.
- Cummings, E. M., Hollenbeck, B., Iannotti, R., Radke-Yarrow, M., & Zahn-Waxler, C. 1986 Early organization of altruism and aggression : Developmental patterns and individual differences. In C. Zahn-Waxler, E. M. Cummings, & R. Iannotti (Eds.), *Altruism and aggression : Biological and social origins*. New York : Cambridge University Press. Pp.165-188.
- Dodge, K. A. 1983 Behavioral antecedents of peer social status. *Child Development*, **54**,

- 1386-1399.
- 越中康治 2001 幼児の対人葛藤場面における第三者の行動 広島大学心理学研究, 1, 193-217. (Etchu, K. 2001 Third-party behavior in interpersonal conflict situations in preschool children. *Hiroshima Psychological Research*, 1, 193-217.)
- Goldstein, S. E., Tisak, M. S., & Boxer, P. 2002 Preschoolers' normative and prescriptive judgments about relational and overt aggression. *Early Education and Development*, 13, 23-39.
- 後藤宗理 1998 子どもに学ぶ発達心理学 樹村房
- 濱口佳和 1992 挑発場面における児童の社会的認知と応答的行動との関連についての研究 教育心理学研究, 40, 224-231. (Hamaguchi, Y. 1992 A research on relationships between children's social cognition and their reactive behaviors in provocative situations. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 40, 224-231.)
- 畠山美穂・畠山 寛・山崎 晃 2002 幼児期及び児童期の攻撃行動と仲間関係に関する研究 幼年教育研究年報 (広島大学教育学部附属幼年教育研究施設), 24, 111-117. (Hatakeyama, M., Hatakeyama, H., & Yamazaki, A. 2002 Aggressive behavior and peer relationships in young children and childhood. *Annual Research on Early Childhood*, 24, 111-117.)
- Helwig, C. C., & Turiel, E. 2002 Children's social and moral reasoning. In P. K. Smith & C. H. Hart (Eds.), *Blackwell handbook of childhood social development*. Malden, MA : Blackwell. Pp.475-490.
- 本郷一夫 1994 仲間関係 日本児童研究所(編) 児童心理学の進歩 金子書房 Pp.228-253.
- 磯部美良・佐藤正二 2003 幼児の関係性攻撃と社会的スキル 教育心理学研究, 51, 13-21. (Isobe, M., & Sato, S. 2003 Relational aggression and social skills of preschool children. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 51, 13-21.)
- 片岡美菜子 1996 攻撃幼児の敵意帰属に及ぼすエピソード情報の効果 幼年教育研究 (広島大学教育学部附属幼年教育研究施設), 18, 87-94. (Kataoka, M. 1996 Effects of episodic informations on hostile attribution of aggressive preschooler. *Annual Research on Early Childhood*, 18, 87-94.)
- Killen, M., Breton, S., Ferguson, H., & Handler, K. 1994 Preschoolers' evaluations of teacher methods of intervention in social transgressions. *Merrill-Palmer Quarterly*, 40, 399-415.
- Killen, M., & Sueyoshi, L. 1995 Conflict resolution in Japanese social interactions. *Early Education and Development*, 6, 317-334.
- Lansford, J. E., & Parker, J. G. 1999 Children's interactions in triads : Behavioral profiles and effects of gender and patterns of friendships among members. *Developmental Psychology*, 35, 80-93.
- Lesser, G. S. 1959 The relationship between various forms of aggression and popularity among lower-class children. *Journal of Educational Psychology*, 50, 20-25.
- 前田健一・片岡美菜子 1993 幼児の社会的地位と社会的行動特徴に関する仲間・実習生・教師アセスメント 教育心理学研究, 41, 152-160. (Maeda, K., & Kataoka, M. 1993 The relations between preschoolers' sociometric status and peers', student teachers' and a teacher's perceptions of their social behaviors. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 41, 152-160.)
- 森野美穂 1999 幼児の攻撃行動—いざこざ場面に見られる攻撃行動と文脈による観点から— 日本発達心理学会第10回大会発表論文集, 200.
- 大淵憲一 1987 攻撃の動機と対人機能 心理学研究, 58, 113-124. (Ohbuchi, K. 1987 Motives and interpersonal functions of aggression. *Japanese Journal of Psychology*, 58, 113-124.)
- 大淵憲一 1993 人を傷つける心—攻撃性の社会心理学—サイエンス社
- 首藤敏元・二宮克美 2003 子どもの道徳的自律の発達 風間書房
- Smetana, J. G. 1981 Preschool children's conception of moral and social rules. *Child Development*, 52, 1333-1336.
- Strayer, F. F., & Noel, J. M. 1986 The prosocial and antisocial functions of preschool aggression : An ethological study of triadic conflict among young children. In C. Zahn-Waxler, E. M. Cummings, & R. Iannotti (Eds.),

Altruism and aggression : Biological and social origins. New York : Cambridge University Press. Pp.107-131.

高井弘弥 2004 道徳的違反と慣習的違反における罪悪感と恥の理解の分化過程 発達心理学研究, 15, 2-12. (Takai, H. 2004 Situational antecedent and behavioral tendencies of moral and conventional transgressions : The developmental process of differentiating guilt and shame. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, 15, 2-12.)

田中堅一郎 1998 補遺: 「あとがき」にかえて 田中堅一郎(編) 社会的公正の心理学—心理学の視点から見た「フェア」と「アンフェア」— ナカニシヤ出版 Pp.213-220.

Turiel, E. 1983 *The development of social knowledge : Morality and convention.* Cambridge,

England : Cambridge University Press.

Underwood, M. K. 2002 Sticks and stones and social exclusion : Aggression among girls and boys. In P. K. Smith & C. H. Hart (Eds.), *Blackwell handbook of childhood social development.* Malden, MA : Blackwell. Pp.533-548.

渡辺弥生 1992 幼児・児童における分配の公正さに関する研究 風間書房

謝 辞

本論文は広島大学大学院教育学研究科に提出した修士論文(2002年度)の一部に加筆・修正したものです。本論文の作成に当たり、広島大学前田健一先生にご指導・ご助言を賜りました。心より御礼申し上げます。また、本研究にご協力いただきました幼稚園の諸先生方ならびに園児の皆様に深く感謝いたします。

(2003.10.30 受稿, '05.4.25 受理)

Preschoolers' Moral Judgments About Provocative, Retaliative, and Punitive Aggression in Hypothetical Situations

KOJI ETCHU (GRADUATE SCHOOL OF EDUCATION, HIROSHIMA UNIVERSITY)
JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2005, 53, 479-490

The present study compared preschoolers' judgments of provocative, retaliative, and punitive aggression. Preschoolers (36 boys, 30 girls ; average age 61 months, range 50 to 73 months) were presented with 3 picture stories in which the main character showed either provocative, retaliative, or punitive aggressive behavior. Following each story, the children were asked to judge (1) whether the aggressive behavior was right or wrong, (2) whether they would like to play with the main character, and (3) whether they would behave like the main character. The results were as follows : (1) The children judged provocative aggression to be explicitly wrong ; however, their judgments about retaliative and punitive aggression were equally divided. (2) The children reported that they would like to play with the main character when he or she showed retaliative or punitive aggression, however, they rejected playing with the main characters who showed provocative aggression. (3) The children reported that they would show punitive aggression, but that they would not show provocative or retaliative aggression. The results indicate that preschoolers at these ages have already acquired a rudimentary understanding of retributive justice, and that they tend to justify retaliative and punitive aggression.

Key Words : moral judgments, provocative aggression, retaliative aggression, punitive aggression, preschoolers